Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-28

『義経記』の研究

藪本，勝治

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2011-03-25
(Date of Publication)
2011-10-03
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲5128
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005128

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

氏　　名	藪本　勝治
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学　位　記　番　号	博い第 5128 号
学位授与の　要　件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の　日　付	平成 23 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

『義経記』の研究

審　査　委　員

主　査　　教　授　福長　進
　　教　授　鈴木　義和
　　教　授　市澤　哲
　　准教授　田中　康二
　　准教授　樋口　大祐

論　文　内　容　の　要　旨

論 文 題 目　　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

『義経記』の研究

氏　　名　：　藪本　勝治

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名　（主）樋口　大祐　准教授
（副）福長　進　　教授
（副）市沢　哲　　教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

【論文内容の要旨】

『義経記』は、平安末期を生きた源義経の一代記である。しかしこの作品は、義経の死後二百年あまりを経た室町時代前期になって成立したものであり、したがって、義経の生涯を歴史的事実そのままに描くのではない。むしろ、縦横に成長と展開を遂げた義経とその助力者達にまつわる物語群を、義経の人生史に沿ってオムニバス的に収めた、一種の時代劇的物語であると言える。そのために、従来の研究では、この作品を単なる伝承の集成と見なすのか、それともそれ以上の一貫性と論理性を備えた構想力の産物と見なすべきか、議論が分かれていた。研究史的には、作品論と伝承論という二つの流れの相剋として展開してきたわけだが、『義経記』に対する二つの視座は、〈義経の物語〉と〈義経の助力者の物語〉とのいずれを中心に据えて捉えるかということと対応していると言える。

この作品は間違いなく義経を主人公としており、義経の不遇な人生と死という〈義経の物語〉の大枠を持っている。ところが、その叙述の中心は義経の従者達の活躍すなわち〈義経の助力者の物語〉にある。『義経記』では、大枠である前者が後景に退き、叙述においては後者が肥大化してしばしば本筋が見失われるのである。こうした特徴は、各場面を劇的に描くという意味では効果的な叙述であると言える一方で、『義経記』をひとつの文学作品として読もうとするときには統一感を欠いた散漫な作品との評価をもたらしてきた。しかし、〈義経の物語〉と〈義経の助力者の物語〉とが、この作品の中でともに欠くことのできない基本的な要素であることは事実である。両者はせめぎあいながらも協調して『義経記』を構成する二つの軸であると言えよう。したがって、『義経記』の全体像を明確に把握するためには、作品論と伝承論という相剋する両者の架橋がなければ困難であろう。

そこで本論文では、『義経記』の物語の中心軸がみえにくくなる過剰な逸脱を『平家物語』等先行の軍記文学とは異なる思考・論理として積極的に読み直すことで、この作品の再評価を試みたい。そのための方法として、この作品の中で義経に関わる人物達の各エピソードとその表現に焦点を当てる。すなわち、各説話の変容過程における『義経記』の位置を分析することで、〈義経の助力者の物語〉と〈義経の物語〉との協調およびせめぎ合いの様相を明らかにしていきたい。また、その作業を通して、義経表象史上における『義経記』の位置付けと文学史的意義を考察したい。それは、近世を経て近現代に至るまで人気を博し続けてきた義経の表象に『義経記』を対置することによる、義経像の系譜学的相対化にもなるだろう。こうした追究の先に、不遇ながらも本来的な正当性を帯び社会体制から逸脱する「義経的なるもの」に対して、人々が何を期待し、またどのような社会的機能を担わせてきたのかという、普遍性を帯びた問題へのひとつの視角を提供することとなれば幸いである。

＊　　＊　　＊

本論文の課題と意義については上記の通りである。次に、本論文の構成および各章の概要について、簡略ながら以下に示しておく。

本論文**第一章「金商人吉次と陵兵衛」・第二章「伊勢三郎の助力と伝承」**は、『義経記』に記された牛若奥州下りとその助力者について、具体的には金売り吉次・陵兵衛・伊勢三郎の各人物について、他の諸文献に描かれるものとの差異を検討し、『義経記』の記述の特質とその生成過程を探ったものである。またその作業を通して、『義経記』の記述と論理が、それ以前の文献において前提となっていた政治的文脈から乖離し、個々の説話の素材となった〈義経の助力者の物語〉の文脈に基づく伝承者の視点・価

値観・論理に強く規定されていることを論じた。

しかしそれとは別に、『義経記』という作品全体を支える求心的論理、イデオロギー的基軸もまた、確かに存在している。そこで**第三章「頼朝と義経の対面」**では、関東で挙兵した兄頼朝のもとへ義経が馳せ参じて感動的な対面を果たす場面を取り上げ、源氏の正統的系譜の絶対性を保持・再生産する論理が『義経記』を統御していることを論じた。また、当該場面の表現からは、こうした権力構造を内包した〈義経の物語〉が『義経記』の享受者にも共有されていたことを読み取ることができることを指摘した。

かくして、『義経記』の表現と構造からは二つの異なった論理を見出すことが可能となる。すなわち、個々の説話の素材となった〈義経の助力者の物語〉の成長と台頭に基づく、政治的文脈から乖離した伝承者達に寄り添った論理と、『義経記』という作品全体が前提とする、固定的価値観としての源氏将軍の権威の絶対性を保守・再生産するイデオロギーに立脚した〈義経の物語〉の求心的論理である。そこで、**第四章「土佐坊正尊と江田源三の物語」・第五章「『義経記』の義経主従」**では、平家を討ち取った源義経が、鎌倉から派遣された土佐坊正尊によって襲撃された、義経没落の転換点である、いわゆる堀川夜討事件を主に取り上げ、『義経記』が内包する二つの論理の相剋と協調の有様について論じた。

この事件に登場する土佐坊正尊と江田源三という二人の人物について、『義経記』の記述の特質とその生成過程を検討すると、この作品に流入した〈義経の助力者の物語〉の伝承が、『義経記』を統御する〈義経の物語〉としての物語構想を、本文の内部において相対化している、という知見を得ることができる。ただし、義経の貴種性や〈義経の物語〉の求心力を抜きにしては〈義経の助力者の物語〉は存立し得ないこともまた事実である。したがって、〈義経の助力者の物語〉は二重の志向性を併せ持っていることになる。すなわち、義経を貴種として戴き忠節を尽くすことを道徳としながら、一方では鎌倉幕府という体制のみならず時には自らの拠って立つ〈義経の物語〉自体をも相対化してしまう、権威への依存／権威からの自律という相矛盾する二重性である。

このように、『義経記』の二つの論理の相剋は、下敷きとなる物語の大枠が持つ求心力と、そこに割り込む形で参加しようとする複数の自律的な物語群との不可避的なせめぎ合いとして理解される。つまり、流離する貴種を下位身分の助力者が支えるという義経主従の構造が、助力者の自律化・主体化を可能としているわけだが、『義経記』においては、義経を戴く助力者が活躍する／助力者の過剰な主体性が義経の権威性を表現的に動揺させるという、表裏一体でありながらも相剋する二つの現象が同時に生じているわけである。さらに、義経の助力者の主体化と下位身分化は、名目的な秩序関係とは別の次元で実力を付けた人々が文化の中枢に入り込んでくるという、南北朝の動乱を経た社会的文脈を象徴する文学表現として積極的に評価することができる点も指摘できる。つまり、下位身分の人々が文学史上表層に浮上してくる現象と、前提的イデオロギーの遍満・固定化（あるいは形骸化）という、相反する（ように見える）二つの現象は、ともに文学史的潮流に一致した、室町期という時代の所産なのである。

しかし、下位身分の人々の物語が〈義経の物語〉において積極的に付会され得たことは単に偶然と見るべきではない。平安末期以来現在まで生まれ続ける義経表象史の上に『義経記』を置いてみると、この作品に見出すことのできた権威的求心性／過剰な自律性という二重性が、不遇ながらも本来的な正当性を帯び社会体制から逸脱する性質を備えた義経の物語が当所から含み込んでいた二重性であることが見えてくる。そこで最後に**終章「「判官びいき」と義経観」**ではこうした問題について、義経表象の変遷を史料的に整理した上で「判官びいき」という言葉の語誌をたどることで、現在にまで引き継がれる悲劇の英雄としての義経観を歴史的に定位し、その相対化を試みた。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論文審査の結果の要旨

氏　　名	藪本　勝治
論 文 題 目	『義経記』の研究

要　　旨

本論文は 12 世紀日本に実在した人物である源義経に関する説話を集成した『義経記』（室町時代前期の成立とされる）を対象として、その文学的特徴・価値を多角的に追究しようとした野心的な論考である。『義経記』は日本文学史においては従来、『平家物語』を中心とする「軍記物語」というジャンルの中に位置づけられてきた。しかし、12 世紀の保元・平治の乱から治承・寿永の内乱を経て鎌倉幕府の創設に至る時期の歴史を叙述した『保元物語』『平治物語』『平家物語』等が「軍記物語」の代表的作品として価値の中心を担ってきたのに対し、同じ時代を背景としながらも義経の生涯の一時期を切り取って従者たちの活躍する複数の説話を並列させた印象を与える『義経記』は、その民俗学的世界との近さを称揚されることはあっても、全体的には時代認識が薄弱で構成力も不充分な亜流的作品と見なされてきた。

本論文は貴種である義経の悲劇的な一生を描いた物語としての枠組みの存在を認めながらも、そこから逸脱し、または枠組みを食い破るような彼の助力者や従者たちの活躍ぶりの記述を分析し、両者のせめぎあい、あるいはテクストの中で後者の論理が前者の枠組みを圧倒してゆく過程に『義経記』の画期性を見出そうとしている。第二次大戦後の歴史社会学派以来続いて来た、『平家物語』等の前期軍記物語の評価軸を『義経記』に適用しようとする文学史の志向を退け、14 世紀の南北朝動乱を経た中世後期の文化的想像力に基づく新たな評価軸を打ちたてようとした本論文は、個々の論証、および細部の詰めに不充分な点が散見されるものの、将来の文学史の書き換えをも可能にする射程距離を持った、スケールの大きな論考であると評価することができよう。

本論文は序章、第一章から第五章に至る各論（補説を含む）、および終章の計七章から構成されている。序章『義経記』への二つの視座」は、当該作品を＜義経の物語＞と＜義経の助力者の物語＞のせめぎあう場ととらえつつ、大枠である前者が後景に退き、個々の叙述においては後者が肥大化していく傾向があることを指摘、後者の具体的な叙述を分析することで『義経記』の再評価をめざす本論文の基本姿勢が明言されている。第一章「金売り吉次と陵兵衛」第二章「伊勢三郎の助力と伝承」では牛若奥州下りとその助力者の位相について、他の諸文献に記載されている状況との差異を検討した上で、それらの諸文献では前提とされていた同時代の政治的文脈が『義経記』においては抹消され、鋳物師や刀鍛冶等の職能民の系譜を引く＜義経の助力者の物語＞として書き直されていることを明らかにしようとした。第三章「義経と頼朝の対面」では、一転して『義経記』全体を支える求心的論理、イデオロギー的基軸として源氏の正統的系譜の絶対性を保持・再生産する論理が存在することを当該場面の分析を通じて証明しようとしている。

第四章「土佐坊正尊と江田源三の物語」第五章「『義経記』の義経主従」では、前三章の分析結果を受ける形で、平家を打倒して京で検非違使として任官中の義経が兄頼朝の放った刺客に襲われる、いわゆる「堀川夜討」の場面を取り上げ、主要登場人物である土佐坊正尊と江田源三に関する記述を検討することを通して、上述の二つの論理の相克と共存の諸相を探っている。また、その過程で、下位身分の人々が文学史の表層に浮上してくる現象と、前提的イデオロギーの遍満・固定化という、一見相反する現象を、室町期の時代的所産として位置付けている。終章「「判官

主査記載 氏名・印	福長　進

びいき」と義経観」では、近世から20世紀に至る義経表象の変遷を史料的に整理し、義経を悲劇の英雄としてのみ位置づけるような義経観が歴史的に相対的なものでしかないことを証明、翻って『義経記』における義経表象の豊かさを世界文学的な普遍性の下に読み直しうる可能性について言及し、今後の研究への展望としている。

以上のように、本論文は『義経記』評価の問題、日本中世文学史の書き換えの問題にとどまらず、「日本人」の歴史的想像力における「英雄」像の問題等、多岐にわたる普遍的な問題に斬り込もうとしており、日本文学研究の若手研究者として今後さらに研究を発展させてゆくための基礎として、充分な意義を有するものであるということができよう。もちろん、不充分な点も散見され、特にいわゆる＜義経の助力者の物語＞が枠組みとしての＜義経の物語＞に食い込んでいく際の編集上の具体的状況（筆者が想定している職能民の「語り」がどのようにして文字化されるのか、また文字化された説話が如何にして再「語り」化されるのか、といった経緯についての分析等）に対する目配りは充分とはいえない。また、金売り吉次、伊勢三郎、土佐坊正尊、江田源三等の説話に関する検討は少なからぬ成果を挙げているとはいえ、武蔵坊弁慶、静御前、佐藤忠信等の他の主要登場人物についてはまだ手つかずの状態であり、『義経記』研究としてはまだまだやるべきことは多いと言わざるを得ない。

しかし本論文の最大の長所は、＜義経の助力者の物語＞の出現が単なる偶然や些事ではなく、室町時代の時代状況の中で一定の必然性を持った太い流れの中の出来事であることを多角的に証明しようとした点、そしてそのことを通じて、古典主義的、権門体制中心的な傾向を持った従来の文学史記述を、室町時代の社会的現実を踏まえて書き換える可能性を提示したことにある。その意味で本論文は、『義経記』や「軍記物語」ジャンルの枠を超えた、東アジアの15・16世紀という時代の文学・文化に関する地域横断的な研究テーマを新たに呼び込むものでもあり、今後の発展を充分に期待しうる成果であるといえよう。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、論文提出者　藪本勝治　が博士（文学）の学位を授与されるにたる資格を有するものと判断した。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	福長　進	副査	教授	鈴木義和
副査	教授	市澤　哲	副査	准教授	田中康二
副査	准教授	樋口大祐			